

# 中学生・高校生の平和意識の形成

6年●●

附属担当教員●●

## ○目的・意義

平和意識の形成にどんな要素が関与しているのか、興味を持ったことが本研究の始まりである。本研究は「過去の平和に関する経験」と「現在の平和意識」の関係を調査し、教育を含む経験・環境が平和意識形成にどのように関与するかを考察するものである。現在の平和意識を調査した先行研究はあるが、過去の経験との相関を考察したものはない。また、有効な平和教育のあり方に示唆を与える。さらに、平和意識の形成の過程を探究することは、その他の意識形成の過程を明らかにできる可能性があるという点で、本研究には意義がある。

## ○質問紙による調査

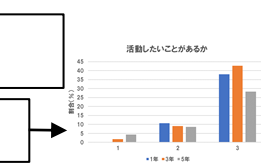
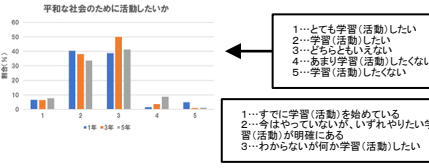
【方法】質問紙による全数調査

実施日：1月15日(金)

対象：奈良女子大学附属中等教育学校1年(中1)生121人、3年(中3)生110人、5年(高2)生92人、計325人

質問内容：過去(小学校以前、小学校、中学校、高校)の平和に関する体験

・現在の平和意識…平和であるための要素、接する機会、知識、学習・活動意欲



【知見】

①過去の平和に関する体験について

・平和、戦争について学ぶ機会は小学校の時期が最も多い  
・「本物の(実感を伴う)体験」(現地での学習、戦争経験者の話を聞くなど)は小学校の教育の場で行うことが多い  
・中学校・高校時には戦争に関するものに接する機会が少ない

②現在の平和意識について

・平和に対する意識は中学生・高校生間ほとんど変化しない  
・平和への学習・活動意欲は学年が上がると低くなる  
・平和とは、単に戦争をしないだけでなく、経済、外交関係、医療、教育などの多くの要素を満たしている状態と認識している人が多い  
・学習・活動意欲はありながら何をしても良いかわからないという人が多い

③体験と平和意識の関係

・血縁者から戦争や平和に関する話を聞いた場合に、平和意識が高まる

## ○新たな問い

- ①平和意識の形成に必要な「本物の体験」とは何か？
- ②小学校では実感を伴う体験をする機会が多いが、中学校以降はどのような平和、戦争に関する体験をするのか
- ③学習・活動意欲はありながら何をしても良いかわからないという人が多かったが、具体的にやるべきことを提示されれば本当に実行するのか、質問紙調査の「現在の平和意識」の回答は信頼できるのか？
- ④学年が上がると平和への学習・活動意欲は学年が上がると低くなるのはなぜか

## ○方法～インタビュー調査の実施～

【概要】インタビュー対象者：奈良女子大学附属中等教育学校6年(高3)生7人(A、B、C、D、E、F、Gと呼称)

インタビュアー：坂口胡桃 日時：4月12日(月)～4月19日(月)、30分～1時間

【共通する質問】

①現在の平和意識について

・どんな状態が平和か ・今、平和だと思うか ・平和な社会を実現するために何が必要か

・あなたの行動で社会は変わると思うか ・平和のために何か行動できるか

②過去の平和、戦争に関する体験について

意識の高さの変化を「平和意識グラフ」に描き、転換期での、体験、感じたこと、考えたことを説明してもらった

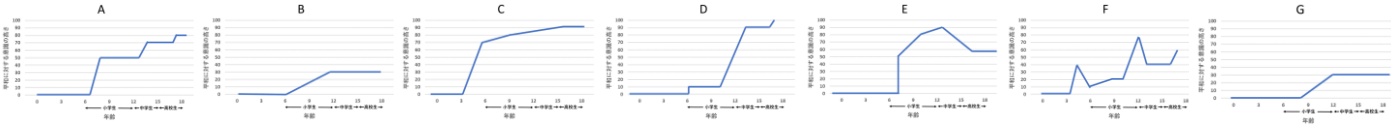
【留意事項】

・自然な回答が得られやすいように、インタビュアーと同学年の6年生にインタビューした

・インタビュー協力承諾者から、平和への活動意欲、広島への修学旅行の経験、現地での体験の有無が偏らないように対象者を選んだ

・インタビュー時は、共通する質問に答えてもらうだけでなく、特徴的な回答があればその部分をより詳しく説明してもらうようにした

## ○結果



【修学旅行・広島での体験について】

B、E、F、Gは12歳の時に広島への修学旅行を経験

→全員が12歳時に平和意識が最も高くなっている

【平和記念資料館の見学時の心情】

A「自分の想像とのギャップが少し衝撃」→グラフは90に上昇

F「一番印象的、どこか異国のように感じていたのが、本当のことだと感じられた」→グラフは80に上昇

G「雰囲気暗く怖かった、これがいま起こったろうと心配した、衝撃を受けた」→グラフは70に上昇(Cは4歳時に家族で広島平和公園を訪れた)

B「写真で見た通り、(ショックだった)とはかきいらない」→グラフは30に上昇

G「ここまで何度も見せなくてもわかりすぎるほどだった」→グラフは30に上昇

【物語について】

A：ちいちゃんのかけおくり「感情移入して(戦争)は悪いことなんだから感情的に理解するようになった、かわいそう」

C：ちいちゃんのかけおくり「傷つて人がいて悲しい、なぜ主人公がこんな目に」

E：はだしのゲン「自分に起こった悲しい」

F：タイトル不明(原爆)に関するアニメ映画「実際に自分がそんな状況になったらどうしよう」

D：ちいちゃんのかけおくり「戦争に対しての危機感を持つにはストーリー性があつたら、実感が湧かなかった」

E：故郷(魯迅)「物語だったから、自分の中でフィクションだから、事実とわかっていても心に響かない」

【中学・高校の体験について】

B「授業でやったのかも思い出せないけど意識がない、覚えてない」

D「同年代の子の意見を聞いて考える機会がなかった」

E「中学校では知識についてが多かったから、触れ合った経験がなくて実感がない」

A「授業で影響があったものはない、自分で家でテレビを見た」

C「地理の授業でやった、情報は多い、考えることは多くない、家族で鹿島館の知覧(特攻平和館)に行った」

F「授業で考えたことはない、最近のミャンマーのニュースを観て考えた」

・実物を見たことにより、感情が動いて戦争の存在を理解すると、意識が高まったと感じる  
・事前の知識との差をあまり感じないと、意識が高くなったと感じにくい

・登場人物に共感したり同情して印象に残るもしくは  
・物語の中の世界だから実感が湧かない

・中学校以降の授業では知識を得る機会があっても考える機会ほとんどない  
・平和意識に影響を与える体験は、メディアや戦争に関する施設から個人的に得るものがある  
・ただし、A、B、C、D、Gの意識のグラフは中学校以降も下がっていない→学校で平和教育を受ける機会がなくても平和意識は変わらない

【平和への活動意欲について】

A(どちらともいえない、何をしてもいいかわからない、考えたことがない、面倒くさい)

B(簡単なもの(要らなくなった服を送るなど)はしてみたい、面倒な手続きがいらないものはやりたくない)

C(したい、今はやっていないが、いずれやりたいことが明確にある)

D(とてもしたい、いざやりたいことが明確にある)

E(したい、わからないけどしたい)

F(小さいこと(募金、いらぬ服を送るなど)はやる、ボランティアは自分の生活に余裕があるなら)

・何をしても良いかわからないと答えた人でも、平和のために出来ることを答えていた  
・自分の生活に影響を与えない範囲でやりたい人が多い

## ○考察

・広島での活動であれ物語を読むことであり、単に経験するだけではなく、過去の現実であると認識し、感情移入した場合に平和意識が上がったと感じている  
→経験しただけでは大きな変化は得られず、経験したことが実感できるか、が平和意識の形成に重要な要素である  
・中学校以降は学校で平和教育を受ける機会が少なくても、平和意識が低下しないと感じていた→一旦形成された平和意識は以後も維持されるため、小学校時経験の在り方が重要である  
・中学校以降は学校での教育よりはむしろ、平和に関することに個人的に接するかどうかで、平和意識の向上に違いが生じる  
・質問紙調査で平和のための活動として「何をすればわからないがしたい」と回答した人も、インタビューでは、平和のために出来ることを答えていた→したいことがあるかに加えて、活動にどれだけの時間や労力を割けるかに平和意識の高さの違いがみられる  
・6年生は自分の時間に影響を与えない範囲で平和のための活動をしたと答える人が多かった→質問紙調査で学年が上がると平和への学習・活動意欲が低くなっていたのは、学年が上がると時間に余裕がなくなり、意欲があっても平和のための活動に時間を割くことが出来なくなるからである

## ○今後の研究計画

【質問紙調査の再実施(5年生)】

- ・インタビューで問い方を工夫することで質問紙で得られなかった情報が得られたので、それを生かした質問紙を作成したい
- ・前回の質問紙では過去の平和に関する体験の有無しか問わなかったが、抱いた感情の種類も加えるべきである
- ・現在の平和意識については、活動したい項目の内容に加えて、どの程度力を入れて取り組みたいのかという、活動の規模を問う質問にする
- ・平和の要素を問う項目については、提示されたものをすべて選択していたという印象があるので、重要度によるランキング形式にする

【インタビュー調査】

平和に関する体験のうち、実感を伴う場合とそうでない場合にはどのような違いがあるのか聞き取る

## ○インタビュー調査の意義

- ・経験の重みや、平和のための活動意欲はインタビューにより実感を伴って伝わってきた。質問紙の回答では得られないことであり、人に直接話を聞くことの意義を感じられた
- ・対象者には自由に話してもらったが、類型を発見できた

【参考文献】伊藤 泰郎「広島県の小中学生の平和学習の経験および戦争と平和に関する知識や意識の分析」(『現代社会学』13、2012年)、村上 登司文「平和形成方法の教育についての考察－中学生の平和意識調査を手がかりに－」(『広島平和科学』28、2006年)、関口 靖広「教育研究のための質的研究法講座」(北大路書房、2013年)  
【謝辞】本研究を進めるにあたり、奈良女子大学文学部の●●先生にご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。